

高1 総合講座「世界の古典に学ぶ」の取組内容と生徒への教育効果

杉山 剛士

(武蔵高等学校中学校校長・社会科)

要 旨

本校で開講されている「総合講座」の枠組で、「世界の古典に学ぶ」という講座を開講した。この取組を進める中で、人類の共通財産ともいえる「古典」を題材に、生徒自身が自己の生き方や社会の在り方について洞察を深めることができたと考える。さらに、仲間とともに「古典」に向き合うことにより、他者を受容する大切さや、対話という協働作業を通してさらなる高みに向かっていく楽しさを体感できたと推察される。その教育効果は極めて高い。

はじめに

2020年度及び2021年度、高校1年生の「総合講座」として、「世界の古典に学ぶ」を開講した。これは、世界に「古典」として残っている名著名作を、抜粋ではあるが、生徒同士で読み解き、対話をしようという試みであった。講座設定の趣旨・内容について紹介するとともに、生徒への教育効果についても考察したい。

1. 講座設定の趣旨と講座開講の経緯

「古典」は多くの人に読み継がれてきた人類の知的財産である。その「古典」を題材に、私たちは現代をいかに生きれば良いのか、またどのような社会を構築していけばよいのかという点について、示唆を得ることができる。

そこで、高1総合講座の一つとして「世界の古典に学ぶ」を開講した。この講座では、国内外の著名な「古典」を取り上げ、その精読を進める中で、そこから考えたことや感じたことについて、生徒間で自由に対話を行なうこととした。

「世界の古典を学ぶ」ではなく、「世界の古典に学ぶ」という講座名にしたのは、「古典を」理解することに目的があるのではなく、「古典に」向き合うことによって現代社会での生き方や社会の在り方を自由に考えて欲しいという願いがある。

また、「対話」を生徒に求めたのは、こだわりがある。「議論」ではなく、「対話」である。

勝ち負けや正しさを競うのではなく、どんな意見や考えでも自由に表明し、他者の意見に耳を傾ける。そのことが自己の意見の変容につながる。勝敗や結論を導くことが目的ではない。「対話」のプロセスや楽しさを実感してほしいという願いが込められている。

対話には三つの意味合いがある。一つは「古典との対話」、次に「仲間との対話」、最後に「自分自身との対話」である。耳を澄ませて、先哲や仲間からの声を聞くとともに、自らの内なる声を聞く。そして何よりも、対話を楽しむことを生徒には求めた。

本講座を開講しようとしたのは、私自身が一般社団法人アスペン研究所が実施するアスペン・セミナーに参加したことがきっかけである。

アスペン・セミナーは1950年にアメリカのコロラド州の保養地であるアスペンで始まったものであり、その後日本にも広がった。このアスペン・セミナーの設立の経緯やその後の展開について、日本アスペン研究所のホームページでは、以下のように紹介している。少々長いですが、引用したい。

【アスペンの原点とその目指すもの】

瑣末化への警鐘

第二次世界大戦後、国際関係は新たな緊張をはらみ、原爆に代表される技術が戦争の危険性を増大させていきました。

一方、商業主義、効率主義が弊害をもたらしつつあった米国にとって、ヒューマニストとして真に人間性溢れるゲーテの生き方が手本になるとして、ロバート・ハッチンス（シカゴ大学総長）、モーティマー・アドラー（シカゴ大学教授・哲学）らは「ゲーテ生誕200年祭」を企画し、人間精神のあり方を問う出発点にしたいと考えました。

1949年、米国コロラド州アスペンで開催された「ゲーテ生誕200年祭」に、人道主義者・哲学者のアルバート・シュバイツァー博士、スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセットらと共に招かれたハッチンスは、「"対話の文明"を求めて」と題する講演を行いました。彼はそのなかで「われわれの時代の特徴のうち最も予期せざるものは、人の生き方においてあまねく瑣末化（trivialization）が行きわたっていることである」とし、「無教養な専門家による脅威こそ、われわれの文明にとっての最大の脅威」、「専門家というものは、専門的能力があるからといって無教養であったり、諸々の事柄に無知であったりしていいものだろうか」と問いかけ、「人格教育」の必要性和相互の理解・尊敬に基づく“対話の文明”を訴えて、聴衆に強い感銘を与えました。

ここで提議された、「専門化と細分化，職能主義，効率主義，短期利益主義などの飽くなき追求によって失われていく人間の基本的価値やコミュニケーション，あるいはコミュニティを再構築するにはどうすれば良いのか」という問題意識が，まさにアスペン・セミナーの原点となりました。

時の試練に耐えた古典の普遍的価値に学ぶ

こうした考えを受けて，1950年，学者，芸術家，実業家たちが日常の煩雑さから解放され，ゆっくりと語りあい，思索するための理想的な「場」を提供することを目的として，アスペン研究所が設立されました。また翌年には「アスペン・エグゼクティブ・セミナー」がスタートしました。

このセミナーでは，アドラー自身が編纂にあたった西欧の名著全集『グレートブックス』から，数百ページにおよぶ古典抜粋集を基本テキストとして使用するプログラムを導入しました。アドラーのプログラムは，時の試練に耐えた古典名著を共通のテキストとして，「過去の人々は何に価値を見出し，どう生きたのかを考え，そこからわれわれは何を基準に，どう行動するのか」などを対話によるコミュニケーションを通じて，各自の答えを見つけ出していこうとするものでした。

ハッチンスの提起した問題意識と，アドラーの開発したメソッドを基本としたユニークなセミナーを中核として，現在では政治・経済・外交などの分野における政策志向型の「ポリシー・プログラム」，カレントな課題をテーマとする「トピカル・セミナー」，海外のアスペン研究所との連携による諸活動など，アスペンの活動領域は大きく広がっています。

アスペンの理念は世界へ，そして日本へ

アスペンの活動内容とメソッドは，国際的にも極めて高い評価を得ており，ドイツをはじめイタリア，フランス，インド，ルーマニア，スペイン，プラハ，メキシコ，キエフでも，それぞれ特徴をもった活動が推進されています。

日本では1975年に提携活動が開始され，1992年にはアスペン・インスティテュート・ジャパン・カウンスルが発足。日本でも本格的なエグゼクティブ・セミナーを実現したいという機運が高まり，1998年4月，設立に尽力してきた小林陽太郎氏（元・富士ゼロックス株式会社 取締役会長）を初代会長として日本アスペン研究所が誕生しました。

日本版エグゼクティブ・セミナーの開催にあたっては，本間長世先生（アメリカ思想史），

今道友信先生（美学・中生哲学）を中心に、多岐にわたる専門の先生方が議論を重ね、西洋哲学に東洋と日本の作品を取り入れた日本独自のテキストを編纂。このテキストは現在もセミナーの要となっています。

エグゼクティブ・セミナーから始まったアスペン・セミナーは、その後、ヤング・エグゼクティブ・セミナーへ対象を広げ、設立 10 周年の 2008 年には高校生を対象とするジュニアセミナーを開始。設立 15 周年を迎えた 2013 年には新たに科学・技術とヒューマニティ・セミナーを企画するなど、人間、文化、社会、自然、世界が直面する問題を、普遍的価値を持つ古典を素材に対話を通じて思索を深めるセミナーを展開しています。

（日本アスペン研究所 web サイト <https://www.aspeninstitute.jp/ideal/>）

筆者は、2018 年に企業で活躍されている皆さんに混じり、アスペン・セミナーの一つであるヤング・エグゼグティブ・セミナーに参加し、豊かな体験と気づきを得ることができた。併せて、高校生セミナーの開催についても協力していたことをきっかけにアスペン研究所とご縁をいただいた。そこで、武蔵生にもうまく活用できないかと思った次第である。

2. 取り上げた古典と内容

一年を通して取り上げた古典は、以下のとおりである。

- ①松尾芭蕉「おくのほそ道」、②旧約聖書「創世記」、③アリストテレス「形而上学」、④カント「永遠平和のために」、⑤オルテガ「大衆の反逆」、⑥ソロー「ウォールデンー森で生きるー」、⑦森鷗外「かのように」、⑧カミュ「ペスト」、⑨鈴木大拙「東洋的な見方」、⑩小田島雄二「シェイクスピア名言集」

以下、それぞれの古典のテキストとしての意義と取り扱い箇所について触れる。

①松尾芭蕉「おくのほそ道」

日本文化に流れるわび・さびの世界、不易と流行を読み取ることができる。このため「おくのほそ道」の冒頭部分である、旅立ちから那須までの旅路を取り扱う。

②旧約聖書「創世記」

西洋の宗教的源流、ひいては西洋精神の源流を知ることができる。天地創造の物語、アダムとイブがエデンの園を追放された原罪の問題、カインとアベルに兄弟殺害、イサクの献供の物語を取り扱う。

③アリストテレス「形而上学」

古代ギリシア哲学から、もう一つの西洋思想の源流、認識論を学ぶことができる。「万学

の祖」とうたわれたアリストテレスの『形而上学』の冒頭部分を取り扱う。

④カント「永遠平和のために」

近代合理主義の集大成を図ったカントが、その思想を踏まえ、晩年に永遠平和の実現のために考えぬいた著作である。今なお戦火がやまない状況の中で、生徒たちはどう考えるか。冒頭の第一章の予備条項と第二章の第三確定条項を取り扱う。

⑤オルテガ「大衆の反逆」

現在世界が抱えている民主主義の課題やポピュリズムの課題に対し、ファシズムが登場する時代背景の中で、スペインの哲学者・社会学者として時代を見ていたオルテガの指摘を、生徒たちはどうとらえるか。冒頭部分の「密集という事実」を取り扱う。

⑥ソロー「ウォールデンー森で生きるー」

SDG s が叫ばれている現在、若くして文明世界を飛び出して自給自足の生活を営んだ、まさにエコロジーや自然主義の原点ともいえるソローの思想から、生徒たちは何を感じるか。ウォールデンで暮らした目的や春の情景を描写した部分を取り扱う。

⑦森鷗外「かのように」

日本の近代化の中で、同時代を生きる知識人はどのような問題を感じていたのかを知ることが、今の日本を生きる生徒たちにとって重要なことである。同時代を漱石とともに生きた鷗外の文学から生徒たちは何を感じるか。ほぼ全文を取り扱う。

⑧カミュ「ペスト」(カミュ著・宮崎嶺雄訳『ペスト』新潮社[新潮文庫], 1969年)

新型コロナウイルスという不条理なパンデミックに遭遇した生徒たちが、「不条理と反抗の哲学」として語られるカミュの代表作から何を感じるか。ペストの発生から収束までを時系列的に抜粋する。

⑨鈴木大拙「東洋学者の使命」

(鈴木大拙『東洋的な見方』角川書店[角川ソフィア文庫], 2017年)

武蔵の三理想の一つとして、「東西文化融合」が掲げられているが、それでは東洋とは何か。西洋とは何か。融合とは何か。生徒はどう考えるか。禅の研究・紹介を通じて、その問題を考え続けた大拙の小論の全文を取り扱う。

⑩小田島雄二「シェイクスピア名言集」(岩波書店(岩波ジュニア新書), 1985年)

シェイクスピアが書いた37編の劇作品から、シェイクスピアの翻訳家として知られる著者が、その中のセリフから100の名言と解釈を記したもの。思春期を生きる生徒たちが、どのような言葉に共感し、学ぶのか。一冊全体を取り扱う。

いずれも、古典まるごと一冊というものではなく、それぞれ抜粋したものである。一回の分量は短いもので5、6ページ、長いもので20ページくらいである。テキストによって

難易度に若干差はある。総じて、古典に日頃親しんでいない高校生から見ると「難しい」と感じるかもしれない。

①から⑦については、アスペン研究所のご理解のもと、高校生セミナーでのテキストを有償で使用させていただいた。⑧、⑨については筆者のほうで編集した。⑩については、当初から生徒で自主的にテキストを編集しようと相談していた結果、選んだものである。

生徒の方からは、「読んでみたい古典」として、資本論、神曲、罪と罰、ロミオとジュリエット、武士道などの候補があがったが、生徒間の協議により、シェイクスピアに絞り、さらにシェイクスピアについても一編の戯曲ではなく、様々な戯曲から「珠玉の言葉」に触れたいということで、小田島雄志氏が編集された「シェイクスピア名言集」を購入し、そのままテキストとして使用した。

3. 授業の進め方

参加生徒は2021年度は5名であった。(2020年度は9名)

授業については、アスペン・セミナーの方式を参考に、以下のグランドルールを定めた。

3-1. 授業前の準備

難解な部分もあるだろうが、しっかりと読んでくる。最低二度読み、できたら気の済むまで読んでくる。意見や感じたことはテキストに書き込んでおく。読み方としては、できるだけ早い時期にまず一度読みをし、その後、授業前に精読することを推奨した。

3-2. 授業中

・引用部分を指摘して、その部分についての自由な意見・感想を言う。

(例)「〇〇ページの〇〇行目の××について、〇〇だと思った(感じた)」

この方法により、散漫な感想や印象を述べ合うのではなく、互いの意見・感想がかみ合ってきた。

・発言したい人は、黙って手元の「名札」を立てる。モデレーター(進行者=筆者)が指名してから発言する。

・一回の意見は長くならないようにする。1分以内、長くても2分以内とする。

・話は飛んでも一向に構わない。結論を得ようとするものではないという趣旨を徹底する。

・ある人が指摘した箇所について、自分も意見を言いたいときは「インターベーション」と言って札を立てる。その場合は、モデレーターが優先的に指名する。同様の意見を重ねて言っても、違った見方の意見を述べても全く構わない。

・対話を活性化するために、場合によっては特別ゲストを招く。2021年度は年間で三名の特別ゲストに参加していただいた。一人目は上智大学の荻野弘之教授。アリストテレスの対話に参加していただいた。荻野氏はアスペン・セミナーの協力者でもあり、本校卒業生、さらに言うとな筆者の同級生で、日本のアリストテレス研究の第一人者である。二人目は、JTの取締役副会長の岩井睦雄氏。氏もアスペン・セミナーの協力者でもあり、本校卒業生になる。オルテガの対話に参加していただいた。三人目は、埼玉大学名誉教授の渋谷治美先生。氏もアスペン・セミナーの協力者でもあり、カント研究の日本の第一人者である。氏とは筆者が埼玉県で勤務している時期から懇意にしていた。森鷗外の対話に参加していただいた。いずれも、一方的に教授するというのではなく、生徒の発言を見守りながら、対話が活性化するように、適宜「補助線」を引くような発言をして頂いた。

3-3. 授業後

・学んだこと、気付いたこと、感じたことなどをリフレクションシートに記入し、それを提出して単元は終了とした。

4. 年間を通しての生徒の感想（2021年度）

年度の最後に全体的なリフレクションシートに記入してもらった。以下、これを原文のまま記したい。

4-1. 感銘を受けた古典

全10作品のうち、感銘を受けた古典を、ウエイトを付けながら各人上位3位まで選ぶこととした。このうち、全体集計で3位までに入った古典とその理由を紹介する。いずれも複数の生徒から評価されたものである。

1位 かのように(森鷗外)

・一つは「かのように」を読む直前に、同じ森鷗外の「うたかたの記」を現代国語の授業で読んでいたので、他の作品と比べ、作風などの諸情報とともに、多くの角度から作品を見ることが出来た。「うたかたの記」を読んだとき、先生が「この作品は色々な見方をして見られる」と言っていて、渋谷先生も同じようなこととお話されていて印象に残った。二つ目は、題名が作品の最も重要なキーワードであり、本質であったことが美しすぎる伏線回収のように感じて、感動したことである。

・秀麿の親への想いと学問への想いが時代的な背景もあり面白く、また最後のシーンにて描かれている情景から、秀麿の今後を予測していたのが印象に残ったから。

2位 大衆の反逆(オルテガ)

・なんとなく自分が日頃考えていることに近いものだったため、すごく共感でき、読んでいて楽しかった。また、自分が考えていたことを、より深く、より鋭くしたような、洗練されたものになっていて、思想の一つの終着点のように感じて、強く感動した。

・現在多くの国で行なわれている民主主義について、自分は最初はそれが社会の到達点であり、これ以上ない最高の体制と考えていたが、民主主義の不完全さや問題を指摘している「大衆の反逆」に感銘を受けたから。

3位 形而上学(アリストテレス)

・「人の思考」の理論(形式化)が非常に簡潔で、なおかつ理論化されているのに、理論と違うような「経験」などの事柄にもふれていて、著者の思考の深さと疑問を徹底的にどこまでも追いかけていくような強い力を感じ、深く印象に残った。

・ゲストの荻野先生が大きかった。形而上学自体、これまで読んだ古典の中では読みやすいもので、初見でも普段より深い理解が得られた。それに加えて、荻野先生の一つ一つの発言がとても納得のいくものが多く(例;ハチやアリは社会をつくる。五感の中でも視覚は「色」という最も情報量の多いものを捉えられるなど)、印象深かった。

3位 ペスト(カミュ)

・コロナ禍の最中だったこともあり、感染症の一連の流れが描かれているところに興味があった。大事(おおごと)にしたくなかった政府、収まり喜ぶ民衆などがコロナと似ている点があり、人々は相変わらず同じという文が刺さった。

・ペスト流行の影響で社会にどのような変化があったのかが細かく記録されていて、パンデミックにどう対処したらよいか教訓として役立つと思ったから。

3位 シェイクスピア名言集(小田島雄志)

・短編で読みやすく名言といわれる文が入っていた。気にいった言葉を選んだ仲間のエピソード、解釈も聞き、それによって見方が変わるのも良かった。

・16~17世紀のヨーロッパのお話で、自分とは時代も場所もまったく異なっているにもかかわらず、多くの名言が自分の考えに一致、類似している点が多かったから。

・たった一言でもものすごく的を射ていて心を動かされた。「どのような人生を歩んでいったらよいか」など社会を生き抜く知恵が身につく名言集だった。

4-2. 仲間との対話から学んだことや気づいたことなど全体を通しての感想

・何百年も前の先人たちが書き残した教訓でも、現代に通じるものがものすごく多く驚いた。古典を読むということは、これからの生き方を考えることにもつながり、非常にいい

経験になった。

・様々な先人の考え方に触れ、これまで自分がぼんやりとしか考えていなかったことが明確に書いてあり、それにも大きな影響を受けた。そして、どの作品も自分に一つの問いに対する答えを示していたように思えた。一年間を通じて、同じ作品をみんなで読み、意見を交わすことで、同じ文章でも解釈が違っていることがいくつか起きた。このことが自分に新たな視点を与えてくれた。この授業はテキストを読むほど面白く、人数が多ければ多いほど深く考えることができ、面白くなると思った。

・一番学んだことは人々の考え方のありようである。ある物事について考えるとなったときに、今まで見たような考え方をしていた昔の人がいて、それが正しいか正しくないかというより、確かにそういう考え方もできるな、でもその考え方があるのならば、こういった考え方もできるのではないかというように、仲間の意見も含め、自分の中の考え方の引き出しのようなものが増えた気がする。ただその中でも自分はこうだという主張が人それぞれあり、それらを理解できないことも当然ある。ただ一人の人間の意見として、そういった考え方もあるのだと、否定せず容認するのが、人として成長することには必要なのではないかと感じた。授業に関してはやはり全てが難しかった。単語も含め、正直理解できなかったことの方が多かった。しかし自分なら絶対読まなかったであろう本を1年通して読んだのは良い経験だと思う。対話も理解できない部分もある中、自分の意見を出せて楽しかった。

・「正しい答えがない」に近いような、一つの事象に対して、いくらでも自分とは違う答えと見方などが存在し、すべて面白く興味深いものになりうるということ。つまりは人の意見を最後まで良く聞き、しっかり耳を傾けることの重要性を強く感じた。

・事前に自分が読み込み、仲間やゲストの方から違う解釈や価値観、そしてその時代の背景事情を聞くことによって、対話が深まっていくことがリベラルアーツの狙い、本質のかなどなんとなく考えた。使用した古典のテキストは選ばれるだけあって、過去の価値観や考えから未来の問題の糸口となるのではないかというものもあった。

おわりに

上記の生徒の感想を読む限り、講座設定の趣旨は達成できたように感じる。「古典」を題材に、生徒自身が相互の対話を通して、自己の生き方や社会の在り方について洞察を深めることができた。さらに、仲間とともに「古典」に向き合うことにより、他者を受容する大切さや、対話という協働作業を通してさらなる高みに向かっていく楽しさを体感できたと推察される。その教育効果は極めて高い。毎回進行をしていた筆者自身も、生徒たちがどんなことを言うのか、実に楽しみであった。

生徒が「感銘を受けた古典」として選んだ上位の「かのように」「大衆の反逆」「形而上学」は、いずれもゲストをお呼びしたときであった。ゲストの存在が対話を深めてくれたことに感謝している。また、上位3作品を選ぶアンケート集計も、結果的には10作品に分散していた。それぞれの「古典」が生徒にとって印象に残っていた。「古典」の持つ教育力の大きさと今後の可能性を強く感じざるをえない。

生徒にとっても感銘を受けた「古典」の一つであるオルテガの「大衆の反逆」には、次のようなフレーズがある。

「人間についての、もっとも根本的な分類は、次のように二種の人間に分けることである。一つは、自分に多くを要求し、自分の上に困難と義務を背負こむ人であり、他は、自分になんら特別な要求をしない人である」

前者がオルテガの言うところの「選ばれた少数者」であり、後者が「大衆」ということになる。ただし、オルテガは「選ばれた人とは、他人よりもすぐれていると思い込んでいる気取り屋ではない」「社会を大衆と優れた少数派に分けるのは、社会階級の区分ではなく、人間の区分であって、上層、下層の階層序列とは一致するはずがない」とも述べている。

（『大衆の反逆』中央公論社（中公クラシックス）、2002年391-392頁）

この部分においても、活発な生徒の対話が行われたことをよく覚えている。

武蔵生は、社会的には恵まれた存在であると思う。だからこそ、決して思い上がった高慢な気もちではなく、オルテガのいうところの「選ばれた少数者」という気概を持ってほしいと願っている。

本講座での様々な経験が、今後の武蔵生の生き方に寄与するとしたら、望外の喜びである。



対話の様子（2020年度）